

ショートレター 海外フィールドワークにおける学習を促す要因の検討 - 協働する他者との関わりに注目して -

著者	山本 良太, 今野 貴之, 岸 磨貴子, 久保田 賢一
雑誌名	日本教育工学会論文誌
巻	36
号	Suppl.
ページ	213-216
発行年	2012-12-20
権利	日本教育工学会: 本文データは学協会の許諾に基づきCiNiiから複製したものである。Relation is Version Of : http://ci.nii.ac.jp/naid/110009596256
その他のタイトル	A Study of Learning Factours on International Fieldwork -Focus on Interaction with Partners in the Program-
URL	http://hdl.handle.net/10112/7992

海外フィールドワークにおける学習を促す要因の検討

—協働する他者との関わりに注目して—[†]

山本良太^{*1}・今野貴之^{*2}・岸磨貴子^{*3}・久保田賢一^{*4}

関西大学大学院総合情報学研究科^{*1}・目白大学^{*2}・京都外国語大学^{*3}・関西大学総合情報学部^{*4}

本研究では、海外フィールドワークに参加する学生の学習を促す要因を、他者との関わりに着目して明らかにすることを目的とした。関西大学大学院が行う海外フィールドワークに参加する学生を対象として、半構造化インタビューを実施した。結果、【研修に参加する教師の状況の理解】と【活動を継続させるための学生間の協働】という二つの要因がわかった。また実践に参加する学生の学習は、他者との関わりだけではなく、継続的な参加によって促されていた。海外フィールドワークでは大学の教師と学生間の関わりに加え、継続的な参加と、学生と現地の人との関わりや学生間の相互支援を促す学習環境をデザインすることが重要であることがわかった。

キーワード：海外フィールドワーク、学習の要因、他者との関わり、異文化間の協働

1. 研究の背景

近年のグローバル化に伴い、学生を海外へ派遣する大学が多く見られるようになってきた。これまで学生の海外派遣の目的は語学研修が中心であったが、最近では文化の異なる人との協働による問題解決を目的とした海外フィールドワークが見られるようになってきた(尾崎 2010)。早稲田大学では、タンザニアのコミュニティ支援を現地の人たちと協働で行うプログラムを実施したり(岩井 2010)、関西国際大学では、カンボジアのある村落の学校を支援することを目的とした活動を行ったりしている(山本 2010)。海外フィールドワークへの参加は、異文化間の協働に必要な知識の獲得や態度を醸成する。

海外フィールドワークへの参加が学生に与える学習成果については、すでにさまざまな研究がされている。例えば、海外でのボランティア活動を通して、対象地域の多様性の理解、問題解決力の向上、主体性の向上(山本 2010)がみられたり、現地の人との協働作業を通して、異文化に対するステレオタイプな見方の変化、異文化に対する関心の向上、異なる価値観の理解が促されたりする(岩井 2010)ことが報告されている。

このように学生がフィールドワークに参加した学習成果は報告されているが、その要因については明らかにされていない。海外フィールドワークのデザインを検討するためには、学生の学習成果に加えて、それらがどのような学習環境の中で学ばれたのかを明らかにすることが重要である。

海外フィールドワークにおける学習の要因を分析する観点として、本研究では他者との関わりに着目する。海外フィールドワークに参加する学生は他者との関わりの中で学ぶ。WARNER and ESPOSITO (2009)は、海外フィールドワークに参加する学生の学習と担当教師との関わりは切り離せないものであると指摘する。担当教師は、学生が異文化間のコミュニケーションにおいて衝突が生じた際に安定をもたらしたり解決のための糸口を提供したりする役割や、体験を思い出ではなく学習へと方向付ける役割などを担う。実際のフィールドワークでは、学生は教師だけでなく他の学生、協働

2012年4月1日受理

[†] Ryota YAMAMOTO[†], Takayuki KONNO^{*2}, Makiko KISHI^{*3} and Kenichi KUBOTA^{*4}: A Study of Learning Factors on International Fieldwork -Focus on Interaction with Partners in the Program-

^{*1} Graduate School of Informatics, Kansai University, 2-1-1, Ryozenji, Takatsuki, Osaka, 569-1095 Japan

^{*2} Meiji University, 4-31-1 Nakaochiai, Shinjuku-ku, Tokyo, 161-8539 Japan

^{*3} Kyoto University of Foreign Studies, 6 Kasame-cho, Saiin, Ukyo-ku, Kyoto, 615-8558 Japan

^{*4} Faculty of Informatics, Kansai University, 2-1-1, Ryozenji, Takatsuki, Osaka, 569-1095 Japan

する他者との共同生活や協働作業を行う。そこで「他者」の姿を観察し、その発言を聞くことでフィールドでの出来事から学習へと方向付けられていく。このように海外フィールドワークに参加する学生は、協働的に活動を行う中で支援され、方向付けられて学習する。そこで本研究では、海外フィールドワークにおいて、他者との関係がどのような学習環境を創り出しているかを明らかにする。

2. 研究の目的

本研究の目的は、海外フィールドワークという異文化間の協働を通じた学習において、参加する学生の学習を促す要因を明らかにすることである。分析の観点として、他者との関わりに着目し、考察を行う。海外フィールドワークにおける学生の学習が、他者とのどのような関わりの中で起こるのかを明らかにすることは、大学教育で行なわれる海外フィールドワークのデザインを検討する一助になると考えられる。

3. 研究の方法

3.1. 実践の概要

対象とする事例は、関西大学大学院総合情報学研究科が2007年度より実施している、フィリピンでの海外フィールドワーク（以下、PFW）である。PFWは大学院生から学部生まで多様な学年の学生によって構成され、実施されている（表1）。PFWに参加する学生は、一度限りの渡航ではなく複数回にわたって渡航し、継続的に現地の人と協働している。

PFWでは、フィリピンのマニラ郊外における初等教

表1 PFW参加者（2012年3月時点）

学生	学年	学生の属性 (性別・参加年数・渡航回数)
A	修士2年	男・4年・8回
B	修士2年	女・4年・7回
C	修士1年	女・3年・6回
D	修士1年	男・2年6ヶ月・5回
E	学部4年	女・2年・2回
F	学部3年	女・1年3ヶ月・3回
G	学部3年	男・1年3ヶ月・3回
H	学部3年	女・10ヶ月・1回
I	学部3年	男・10ヶ月・1回
J	学部2年	男・2ヶ月・1回
K	学部2年	男・2ヶ月・1回
L	学部2年	女・2ヶ月・1回

育の教育改善のための教師研修を実施している。具体的には、現地の教師の視聴覚メディアの活用を促すためのICT活用に関する研修を実施している。このような活動を通して、学生は対象の学校の状況に合わせて使用するメディアや研修方法を検討する。研修を円滑に進めるため、小学校管理職らとの連絡や日程調整など、活動の運営に関わる調整は大学院生が担っている。それ以外の研修計画や研修教材は学年を問わずすべての学生間の議論によって作成される。

PFWの特徴は、継続的な研修の実施である。PFWに参加する学生は、事前準備、現地での活動、事後振り返りという3つの段階を繰り返し、継続的に活動を行ってきた。事前準備では、渡航前に研修案や研修で使用する教材を作成するため議論を行う。事前準備では、週に一度全員で集まり議論をする。学生は、大学が夏季および冬季長期休業中にフィリピンに渡航し、2、3週間の滞在の中で現地の教師に対して、研修を実施する。帰国後は、振り返りのために、全員で実施した研修の成果と課題について議論し、報告書としてまとめる。成果と課題にもとづいて、次の研修の計画を立てる。このプロセスは参加学生の協働によって毎年繰り返される。

3.2. 研究の方法

海外フィールドワークに参加する学生の学習を促す要因を明らかにするため、PFWに参加している4名の学生（学生D、E、F、G）を対象に、参加当初から現在までを振り返ってもらい、どのような他者との関わりの中で実践してきたのか、半構造化インタビューを行った。D～Gをインタビュー対象者として選定した理由は、次の二つである。一つ目は、本研究の目的に従い、継続して参加した学生の中から、上級生および下級生、同級生の学生、もしくは現地の教師との関わり合いを持ち続けて活動してきた学生であることである。二つ目は、参加当初の他者との関わりを振り返りながらインタビューを行うため、参加当初の記憶が曖昧になっている可能性を考慮し、PFWの活動を1年以上3年未満経験している学生であることである。インタビューは、2012年3月～5月の間に各対象に70～80分程度行った。インタビューでは海外フィールドワークにおける学習について、(a)対象学生からみた上級生や下級生、同級生、現地の教師との間にどのような関わりがあったのか、(b)それらが自分の得た学習成果とどのような関連があるのかという質問項目を準備し、筆者らとインタビュー対象者の自由な対話の中で行っ

た。インタビューは録音し、それを逐次文字化して分析データとした。分析方法は佐藤（2008）を参考に次のとおり分析した。まず、文字化したインタビューデータの内容の意味ごとに分割するオープン・コーディングを行った。次に、本研究の目的である海外フィールドワークに参加する学生の学習に関連する他者との関わりに従って焦点的コーディングを行った。最後にそれらに集約し、カテゴリーを生成した。具体的には、【研修に参加する教師の状況の理解】と【活動を継続させるための学生間の協働】が生成され、それらのカテゴリー間の関係性を検討した。実際の分析では、まず、3名のインタビューデータを分析し、カテゴリーを生成した。その後、もう1名の学生のインタビューデータの分析を行い、カテゴリーの妥当性を確認した。分析の解釈の妥当性を高めるため、分析過程全体において筆者らで検討しあった。さらに、学生間の関わりが多くみられる会議場面のやりとりを記録したデータを参照し、解釈の妥当性を確認した。最終的に生成されたカテゴリーは、インタビュー対象者に確認し、妥当性の合意を得た。

4. 結果と考察

分析の結果、学習へと向かう要因として、【研修に参加する教師の状況の理解】と【活動を継続させるための学生間の協働】があることがわかった。

4.1. 研修に参加する教師の状況の理解

学生は、参加当初から対象の学校の状況に合わせた教材の使用や研修の実施ができていたのではなく、対象の学校の状況を考慮しないまま活動を行っていた。例えば学生Dや学生Gは、「パソコン教えるんやっという、なんか教えるっていう一方的な感じはしました。（中略）前までそんな関わり合わんでも、先生がスキルさえ身につけてたらいいんかなって思ってたんです（学生D）」、「やってあげてる。教えてあげてる。教えに行くって、最初やったときはそうだった（学生G）」と述べ、現地の教師と積極的に関わろうとせず、さらに対象の学校の状況を十分な配慮をしていなかった。

しかしながら継続的に教師と関わり、教師のことを知るうちに、研修に参加する教師の置かれている状況を理解するようになる。学生Eは、「（休日に行った研修なので）すごい頑張ってきてくれたんやとか、（研修に）子どもとか連れてきている人もいたじゃないですか。そういうのも見て、子どもの世話とかもあってほんまは家にいたかったやろうに来てくれたんやなって

いうふうに思って」と述べ、休日を返上して研修に参加する教師のコミットメントを認識するようになった。

また学生Eは、「（現地の教師は研修に参加したとしても）お金も出ないし、別にやらなきゃいけないことじゃないじゃないですか、その人の人生で。（教師は）別に授業はちゃんとやっている訳ですから」というように、教師としての仕事はこなしながらも研修に参加する教師の状況を理解しようとするようになる。

【研修に参加する教師の状況の理解】から、学生は対象の学校の状況に合わせて使用する教材や研修方法を検討するようになる。学生Dは、「（現地の教師に対して）偉そうにするのはおかしいかなっていうように、たぶんやっといううちに気づいてきたんかなとかは思いますね」と述べ、一方的に自分たちの知識や技術を提案するのではなく、対象の学校の状況に合わせて研修方法を検討する必要性に気づいた。

4.2. 活動を継続させるための学生間の協働

現地の教師や学校の状況に関する知識や経験がない参加したばかりの学生が、対象の学校の状況に合わせて研修方法を検討することは容易ではない。そのような学生に対して、上級生による足場かけの支援がなされていた。上級生は参加間もない学生と行う協働的な活動の中で、活動に関するさまざまな助言を行い、学生を支援していた。例えば、現地の教師の授業を観察し適したメディアの活用方法の提案を考える際に着目しなければならない視点を提示したり、現地の教師に対して講義を行う際ペアになり関心を持ってもらえる内容を考えたりしていた。学生Dや学生Eは、「相談したりしたときに、一緒になんか、考えてくれて答えを出してくれたり、っていうようになることがあったんで、それはすごい助けになりましたね（学生D）」や、「行き詰まるときも行き詰まっても、ちょっとこれ変えたらいいんちゃうんとか教えてくれる（学生E）」と述べるように、上級生による支援を受けて活動していた。学生間の会議では、学生Aや学生Bが、他の学生が作成した教材や研修中の振り舞いについて、必ずフィードバックを行っていた（会議における会話記録を参照）。

上級生は、下級生に対して足場かけだけではなく現地の教師と関わる態度に関する方向付けも行っていた。「（教師に対する尊敬の気持ち）自分の中だけで気づいたことじゃなくて、たぶん、先輩とか、先輩とかからそういうなんか、そういうのは違うんじゃないかなみたいな（学生D）」と述べるように、上級生からの方

向付けがなされることによって現地の教師の状況を理解すること、そして対象の学校の状況に合わせて研修方法を検討するようになった。このような上級生からの方向付けは、学生Eが、「昨日とかの会議でもみんなゆってんですけど、その自分たちが受け入れてもらえてるのが当たり前じゃないっていうか」と述べるように、会議など参加学生間のやり取りが行われる場面で日常的に行われていた。研修が予定時刻で終わらず延長してしまったその日の学生間の会議において、学生Bは、「家帰らないといけない。(教師は家族のために)夕食を作らないといけない。(中略)早く帰らせてあげないと(学生Bの発言・会議における会話記録を参照)」と、教師の家庭での役割に関する発言をしていた。学生は、現地の教師が当然のように研修に参加しているのではなく、家庭における仕事もある中で参加していることを、上級生の発言から気づいた。

学生は継続的な参加によって上級生へと役割が変化するにつれ、下級生を支援するようになる。上級生は、参加間もない頃に自分にとっての上級生から支援を受けた経験を持つため、下級生がどこでつまづいているのかがわかる。学生Dが、「後輩は、どういう存在かっていうとなんか、成長させてあげたい。(中略)先輩がそうだったように、自分もそう(後輩の見本)でありたいというか」と述べるように、下級生との関わりが生まれる。しかしながらこの関わりは指導という一方的な関わりではなく、相互的な関係であった。学生Dが、「(下級生からの素朴な質問に対して答えられず)全然知識足りてないってことは思ったり」というように、下級生を支援することによって、自分の知識を客観視することができるようになる。

学生間の関わりは、本実践における【活動を継続させるための学生間の協働】によって成立していた。学生は、継続的に PFW に参加し、学生間での相互関係を形成していた。PFW のような学生グループでは、参加する学生の卒業や新しいメンバーの加入が必然的に伴う。このような PFW が持つメンバーの入れ替わりが、活動を継続させるための学生間の協働へとつながり、学生の学習を促す要因となっていた。

5. まとめと課題

本研究では、海外フィールドワークに参加する学生の学習を促す要因を、特に他者との関わりに着目し明らかにすることを目的とした。関西大学総合情報学研究科が行う PFW に参加する学生を対象として、半構

造化インタビューを実施し質的に分析を行った。結果、継続的な海外フィールドワークへの参加による【研修に参加する教師の状況の理解】と【活動を継続させるための学生間の協働】という二つの学習を促す要因がわかった。PFW に参加する学生は、現地の教員を観察し、PFW の上級生から支援を受けながら学習していた。

海外フィールドワークのデザインではこれまで、引率する大学の教師の役割が強調されてきた。本研究では、大学の教師だけでなく、活動の対象者となる現地の人との関わりや協働で活動する学生との相互支援に着目した。学生の学習は、継続的な海外フィールドワークへの参加とそこでの他者との関わりによって促されていた。以上から、海外フィールドワークでは大学の教師と学生間の関わりに加え、継続的な参加と、学生と現地の人との関わりや学生間の相互支援を促す学習環境をデザインすることが重要であるといえる。

本研究では、参加学生のこれまでの経験の振り返りを分析データとした。今後は、実践の参与観察や協働する学生以外の関係者へのインタビューなど多様な調査を行い、学習に関係する諸要因を分析し、学生の学習プロセスおよび学習成果のさらなる具体化を行う。そして、海外フィールドワークのデザインの諸要件を検討していきたい。

参考文献

- 岩井雪乃 (2010) ボランティア体験で学生は何を学ぶのか—アフリカと自分をつなげる想像力—。人間環境論集, 10(2) : 1-11
- 尾崎慶太 (2010) サービスラーニングプログラムを中心とした学びの展開に関する試行的研究—海外サービスラーニングプログラム (カンボジア) の実践と科目との関連性—。関西国際大学教育総合研究叢書, 4 : 87-96
- 佐藤郁哉 (2008) 質的データ分析法。新曜社, 東京
- WARNER, B. and ESPOSITO, J. (2009) What's Not in the Syllabus: Faculty Transformation, Role Modeling and Role Conflict in Immersion Service-Learning Courses. *International Journal of Teaching and Learning in Higher Education*, 20(3) : 510-517
- 山本秀樹 (2010) ジェネリックスキルの獲得に向けた大学教育プログラムの研究—海外サービスラーニング (カンボジア) における実践から—。関西国際大学研究紀要, 11 : 47-55

(Received April 1, 2012)